

## 審査員特別賞

世界の幸せのために私ができること

江戸川学園取手高等学校 1年

箕輪 沙也佳

私たちは世界に気づくことが重要だと思う。2015年の夏、フィリピンのジュニアキャンプに参加したとき、「皆さんの見ている街並みは日本の都会と同じかもしれないが、裏道ではスラム街が広がっている。」とバスの運転手から聞き、ハッとした。「スラム街の人たちは、一体どんな困難に直面しているのか。」世界と私がつながった瞬間だった。

その時の「知りたい」思いは、「ヤングボランティアスタディーツアー」に参加し、カンボジアとベトナムに渡った2017年夏に叶えられた。高校生の中でただ一人中学生だった私は、好奇心でいっぱいだった。カンボジアの孤児院では多くの恵まれない子どもたちと出会った。当初、孤児院のイメージに暗いものを持っていたが、実際には、無邪気でとても明るい、やさしい子どもばかりだった。私の先入観は一瞬にして崩れた。孤児院では子どもたちと紙芝居を協働で作った。ドラえもんやポケモンが好きという子どもたちがいたので、折り紙でピカチュウを折ってあげたら、とても喜んでくれた。自分の好きな漫画がここで愛されていると知り、うれしかった。初対面でも漫画を通じてすぐ仲良くなれることを実感した。心からまた会いたいと思った。

脳性麻痺障害者施設への訪問では、子どもの食事の介助をした。このとき、明らかに色の薄いカレーライスが出てきた。私は理由を聞いて愕然とした。「全員に食事を行き渡らせるように水を多めに入れて量をごまかしている」のだ。また、就労支援団体SUSUに勤める女の子の家庭を訪問したとき、病で寝込む母親を目の前に、「母を治せるほどの経済力と、医師がいないのです。」と彼女は語った。衝撃を受けた私は、ただただ話を聞いてあげることしかできなかったが、彼女は、自分の置かれた環境を常に落ち着いて語り続けた。その様子が今でも強く印象に残っている。

帰国後、私たちは、水戸の「まちなかフェス」で、カンボジア・ベトナムの写真展と募金活動、現地の羽根つきの実演をして、人々にカンボジアとベトナムの今を伝えた。つたない説明でも、道行く多くの人が足を止め、耳を傾けてくれた。自分の経験や見聞きしたことを自分だけのものに終わらせるのではなく、発信してより多くの人と情報共有していくことが大切だと強く感じた。

世界にはいろいろな環境に置かれている人たちがいる。彼らが望むことを多くの人に伝えていくことが重要だと思う。私は、孤児院で触れ合った子どもたちの満面の笑みが今でも忘れられない。元気いっぱい遊ぶ写真や彼らが今欲しがっているものを伝えることが肝要なのだ。子どもの悲惨な様子を取り上げるより、「何が楽しいか、何が喜ばれるのかを発信していくこと」が、今私ができることだ。多くの人々に抵抗なく聞いてもらえること、共感してもらえることこそ、より大きな動きにしていくことができるのだと思う。

これらの海外でのボランティア活動を通じ、私には「いくつかの課題」も見つかった。海外には、現地の今を調べてから行く、「準備」が重要であり、また、現地の人々とより深いコミュニケーションがとれるように「コミュ力向上」が必要だ。

私の夢は、日本でも海外でも活躍できる医師となることだ。多様な文化を背景に持つ外国人とコミュニケーションがとれる英語力を備え、国内で増え続ける外国人労働者に安心を届けられる医師になりたい。そして、世界の子どもたちともつながりのもてるボランティア活動を続けていきたい。

私は今年、コミュカアップのため、「トビタテ！留学 JAPAN」の支援を受けてアイルランドに留学し、夢への第一歩を踏み出す。アイルランドでは、現地の人々の他、移民や留学生との交流の場をたくさん得る。課外授業ではボランティア活動に取り組む。この留学でコミュカをアップさせ、世界の人々に世界の子どもたちの今を伝えていきたい。